



Title	19世紀アメリカにおける女性と装飾：『ゴードイズ・レディズ・ブック』の言説を通じての考察
Author(s)	平芳, 裕子
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 45-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53339
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19世紀アメリカにおける女性と装飾 ——『ゴードイズ・レディズ・ブック』の言説を通じての考察——

平 芳 裕 子

神戸大学大学院

キーワード

ファッション, 装飾, アメリカ, 近代, 女性

fashion, ornament, America, modern age, women

はじめに

1. 『ゴードイズ・レディズ・ブック』のファッションプレート

2. 自他を飾る一女性の仕事として

3. 家を通して表象される女性

おわりに

はじめに

現代日本では推理小説家として有名なエドガー・アラン・ポーの作品に、『室内装飾の哲学』と題されたエッセイがある。1840年に発表されたこの作品の冒頭で、ポーはヨーロッパ人だけではなくアジア人やアフリカ人の家具や室内装飾品に対する国民的センスを比較した上で、「アメリカ人だけが非常識なのである」と述べている¹。ボストン生まれのポーをして「非常識」とまで言わしめたアメリカ人の装飾趣味。問題は趣味の曲解から生じた「華麗」にあった。なぜアメリカ人は過剰に装飾するのか。その理由としてポーが挙げるのは、貴族的伝統を持たないアメリカでは、財力の誇示が上流階級であることの直接の証明となるということだ。このようなアメリカ人の装飾趣味に対する自己批判はポーだけに留まらない。社会経済学者のソースティン・ヴェブレンは、19世紀末のアメリカのブルジョワジーたちに顕著な行動を「顕示的消費」の言葉で表した²。最新流行や華美な装飾品を身にまとうことで、他者に経済力や社会的地位を誇示すること。それは厳格な身分制度の崩壊した近代市民社会において新たな階級意識を構築するための手段であったが、その際とりわけ有効とされたのが女性ファッションであったのだ。それにしてもなぜ、19世紀のアメリカ女性は知識人たちの好奇心を駆り立てるほどに、自他を飾り立てることに夢中になったのだろうか。その理由をトクヴィルは端的に説明している。曰く「虚飾は民主的な世紀に独自のものである」と³。

しかしながらここで興味深いのは、同じトクヴィルが一方で、合衆国建国の民はそもそも「外面的な飾りを敵視していた」と指摘していることである⁴。東部アメリカへ入植してきたアングロサクソン・プロテスタントの人々は、厳格な宗教形式を保ち、装飾を排除し、飾ることに対して否定的であった。彼らにとって重要であったのは内面の美德であり、外見の華美ではなかったはずだ。にもかかわらず、19世紀アメリカでは「これ見よがしに」飾る行為が習慣化する。ならばそもそも禁欲的なプロテスタント的精神をその土壌にしみ込ませた19世紀アメリカにおいて「飾ること」はいかにして肯定され、さらには女性という存在と結びつけられたのだろうか。この問題へアプローチすることは、19世紀アメリカという一時代一地域特有のファッション観や女性観を明らかにすることのみならず、なぜ「おしゃれ」や「装飾」は女性的なものとなされるのか、近代以降の民主社会におけるファッションと女性との関係性の一側面を明らかにすることでもある。

そこで本論は、ポーも執筆者として度々登場した19世紀アメリカの女性誌『ゴードイズ・レディズ・ブック』を手がかりとして、近代社会において装飾やファッションと強い結びつきを有することになった女性性の一面を明らかにしようと試みるものである。具体的には、東部アメリカにおけるファッション普及に大きな影響力をもった『ゴードイズ・レディズ・ブック』創刊の1830年から1850年代初頭までの期間に掲載された雑誌記事を主たる対象とすることによって、この雑誌の言説とイメージにおいて、ファッションの正当化とともにいかに家庭装飾が推進され、自他を飾る行為が女性の仕事として意味付けられてゆくの、そのプロセスを考察する⁵。それではまず、日本ではほとんど知られることのない女性誌『ゴードイズ・レディズ・ブック』を検討することから始めよう。

1. 『ゴードイズ・レディズ・ブック』のファッションプレート

『ゴードイズ・レディズ・ブック (Godey's Lady's Book)』は、19世紀アメリカで最も人気を博した女性誌である⁶。その前身である『レディズ・ブック (Lady's Book)』は1830年にフィラデルフィアで出版者のルイス・ゴードイ⁷によって創刊され、1837年に編集者にセアラ・ヘイル⁸を迎えることで、雑誌のタイトルを新たに出発した。以来、同誌は1840年代におけるアメリカ諸都市の成長と人口の増加、国土の拡大とともに、記録的な出版部数と出版期間を誇る女性誌として発展する⁹。しかし同誌の成功は、単にアメリカ国家の歴史的発展と時代をとものにしたことだけに帰せられるのではない。それは当然のことながら雑誌内容そのもの、とりわけ東部アメリカにおける印刷技術の黎明期から誌面の充実に尽力してきた『ゴードイズ・レディズ・ブック』の特徴的な記事内容に多くを負っていると考えられる。(以下では『ゴードイズ・レディズ・ブック』を適宜『ゴードイズ』と省略表記する。)

出版者ゴードイは『レディズ・ブック』の時代から、東部アメリカの新興階級を対象として、物語や詩、時事情報だけではなく、ヨーロッパの上流階級の趣味や作法を紹介した記事、楽譜やレシピ、版画など、さまざまな話題を提供した。なかでも創刊直後から掲載されたファッションプレートは読者の人気を呼んだ。同誌は東部アメリカの女性誌として初めて、ヨーロッパの雑誌からの転載ではなくオリジナルのファッションプレートを掲載した雑誌であったのだ。『レディズ・ブック』はパリやロンドンに代表されるヨーロッパの最新流行を文字情報として伝達しながら一方で、地元フィラデルフィアの女性たちのための装いのモデルを「フィラデルフィア・ファッション」と名付け、ファッションプレートとして視覚化した¹⁰。とはいえ初期のファッションプレートを、同時代のヨーロッパのそれと比べてみるならば、人物の表情やドレスの装飾の描写において実力の差は明らかである。そこで同誌はヨーロッパへ芸術家を招聘することでファッションプレートの質的向上につとめ、その技術的発展に尽力した。にもかかわらずヨーロッパの出版物が優れているように見受けられるのは、単に技術の問題だけではなく、『レディズ・ブック』が提案した「フィラデルフィア・ファッション」そのものの特質にも起因していると考えられる。それでは「フィラデルフィア・ファッション」とはどのような装いだったのか。

『レディズ・ブック』は述べている。豪華なファッションは愚かしく下品なものであり「ほどほどの装い」が好ましい、と(34, Jan., 59-60.) (以下の本文括弧内は出版年、出版月または号数、頁数を示す)。『レディズ・ブック』にとって真のエレガンスとは「慎重深い装い」であった。それゆえ「フィラデルフィア・ファッション」として標榜された装いを見てみるならば、ドレスの胸元の開きは抑えてあり、レースや装飾品も小ぶりで、ドレスの襷の取り方も控えめである(図1)。「フィラデルフィア・ファッション」は華やかなパリ・ファッションと比べれば地味で素朴であり、それを再現したファッションプレートが技術的にも芸術的にも劣っていると見なされても致し方ない。なぜ『レディズ・ブック』はドレスの慎ましさに拘泥したのだろうか。それは同誌が理想としたファッションが「こころの飾り」としてのそれであったからである(30, No.1, 46)。ファッションがもし、健康を害してまで外見を取り繕うための「ただの飾り」であるならば、それはたちまち非難されるべきものである。しかしながら、ファッションが女性のこころの「明るさ」や「楽しさ」を表すものであるならば、それは極めて有用なものと見なされる。つまりファッションは、それを身につける人の純然たる内面の表現となるとき初めて認められるものとなったのだ。



図1 「フィラデルフィア・ファッション」

このような『レディズ・ブック』の見解には、ファッションを取りまく19世紀前半のアメリカの社会的状況が映し出されていると言える¹¹。東部諸都市の発展と商業の発達とともに、ヨーロッパの文物や最新流行が情報としての価値を持ち始める。『レディズ・ブック』はいち早くそのような社会的嗜好に対応し、情報としての最新流行を雑誌の目玉として取りあげたわけだが、「ファッション」とはそもそもヨーロッパの貴族的伝統のもとで培われた装いの作法である¹²。そのためヨーロッパで生み出された最新流行をアメリカに移入するためには、内面の美德を重んじるプロテスタント的精神を裏切らない装いに改良する必要があったと考えられる。そこで、ただ外見を飾るのではなく、内面と外見の調和を保ち、外見を通して内面が表現されるような装いが『レディズ・ブック』の理想として提示されたのだ。その実現のために具体的に読者に奨励されたのは、最新流行のスタイルや色よりも着用者とドレスとの調和を追求すること、つまりドレスが着用者自身の肌の色、そして他の装飾品と合っているかどうかを重視することであった(30, No.3, 114)。

以上のような「フィラデルフィア・ファッション」は、1837年に雑誌が名を新たに出発すると呼称自体は消えてしまうが、その精神はおおいに推進されることになる。ところが雑誌の人氣が高まる一方で、ファッションプレートに対する批判的見解までもが露にされた。詳細は不明な点が多いが、直接的原因としては、ファッションプレートに描かれた人物のフォルムが不自然にぎこちないということが問題となったと推測される¹³。しかし事の発端はどうあれ、1840年代のファッションプレートをめぐる状況を考慮するならば、その存在がもたらす社会的影響力が一部の読者の間で問題視されていたと考えられる。ファッションプレートは雑誌に掲載されることによって、人々の着飾るという行為を無条件に正当化する。それは日々の生活に即して身だしなみを整えるのではなく、おしゃれそれ自体を目的とする行為である。さらに『ゴードイズ』のファッションプレートは他誌に転載されることさえあった。質の悪い偽物のファッションプレートが、商業経済の発展とともに安価に生産された既製品とともに巷にあふれる。女性たちの消費への欲望をかき立てるファッションプレートは俗悪の象徴と捉えられることさえあっただろう。

それでは、そのような批判に対して『ゴードイズ』はどのような弁明を行ったのであろうか。まず、女性にとってのファッションプレートの有用性を主張した。『ゴードイズ』の掲載するファッションプレートとは、女性誌が掲載する女性読者のためのものであり、なおかつ女性読者自身の要望に応えるものであるとした。この意見を補強するために、ファッションプレートを支持する女性読者からの手紙を添えた(42, Nov., 251)。そこにはファッションプレートが、都会ではなく地方においても流行を知ることのできる手段であることが記されていた。また『ゴードイズ』はアメリカ・ファッションの確立を主張した。ファッションプレート制作の伝

統を喧伝し、その過程においてファッションにおけるアメリカ的なものの追求に尽くしてきたことを強調したのである（45, Feb., 96）。しばしばファッションプレートのタイトルとして記された「アメリカナイズされたゴードイのパリ・ファッション」という表現からは、1776年にイギリスの植民地から独立したアメリカの、ヨーロッパに起源を見立てつつも自国のファッション文化を差別化しようとする試みが見て取れる。それは独立国家の発展期において愛国心をおおいに鼓舞するものでもあっただろう。

『ゴードイズ・レディズ・ブック』のファッションプレートとそれを取り巻く言説の検討を通して明らかになるのは、ファッションが読者に喜びや戸惑いをもって受け止められてゆくまでである。時には配慮を払い、時には戦略的に仕掛けることによって、同誌はファッションを社会的に認知させてゆく。しかし、同誌が19世紀の東部アメリカの流行文化の形成に大きな影響力を持つようになったのは、女性たちのファッションへの欲望を巧妙にかき立てたこと以上に、近代消費社会の黎明期において「着飾る」行為を良き女性の行いとして提示したからだと考えられる。それでは次に、女性たちの身边を「飾る」行為が、いかにして女性の「仕事」として『ゴードイズ』において言説化されたのかを見てゆこう。

2. 自他を飾る—女性の仕事として

「レディ」を掲げた雑誌は19世紀前半のアメリカにおいて数多く出版された¹⁴。なかでも『ゴードイズ』はオリジナルのファッションプレートを掲載した雑誌として名高い評価を得たわけだが、それだけがこの雑誌を特徴ではない。既に述べたように、同誌には乗馬やダンスの仕方の解説、美しい文字を書くための手本、刺繍パターンだけではなく、楽譜や歌詞などの多様なテーマが掲載された。これらのテーマは「レディ」を名乗る雑誌にふさわしく、当時のレディの趣味と教養に関わるものである。レディの姿を、1843年7月号に掲載された版画《私室》（“The Boudoir”）の中に見てみよう（図2）。椅子に腰掛けくつろぐ女性は、小さな本を手にしている。テーブルの上に飾られた三輪の花の左右にも大小二冊の本が平置きにされ、豪華な装丁に厚みのある本にはしおりが挟まっている。女性の傍らには書き物台があり、羽根ペンと一枚の紙が置かれている。テーブルの後方には特徴的な形をしたキャンバスがイーゼルに掛けられており、ドレスを着た女性の姿が描かれている。この絵画の後ろ、壁際に置かれたキャビネットの上には貝殻の置物に花が飾られている。女性のすぐ後ろにはハーブが置かれている。手前の大きな刺繍枠には草花の模様が刺されている。そしてテーブルに掛けられた敷物にも、キャビネットにも、壁紙にも、草花の図案が用いられている。



図2 「私室」

女性自身の装いも目を引く。上品な縁飾りのついたエプロンを身につけている。

このように《私室》には、美しく着飾った女性の周囲に花々で飾られた上品な室内調度品が描かれている。しかしながらこれらの装飾は、版画に華麗な背景を作り出すための単なる視覚的演出ではない。女性を取り囲むさまざまな装飾品、すなわち本や紙とペン、絵画やハーブ、刺繍、小物等は、当時のレディの教養を示す事物である。つまり、読書をたしなみ、手紙をしたため、絵を描き、音楽を奏で、刺繍をする。そのようなレディの振る舞いがここでは実際の道具や制作物とともに描かれているのである。版画はそのような教養を身につけた女性を「レディ」として提示している。そして版画とは別に、雑誌の本編には同様のタイトルの物語が掲載された。そこでは洗練されたレディが、両親の遺産を相続するも無教養で野蛮に育った青年を改心させる様子が語られている¹⁵。このように『ゴードイズ』は、物語や版画的なかで理想的な女性像を描き出しながら、教えを請うべき教師も家族もいない19世紀アメリカの女性たちに向けて、レディの作法を誌面で教示したのである。しかしながら同誌は女性たちのレディに対する憧れをただ煽っていたのではない。

創刊直後から「女性の教育」と称した記事をたびたび掲載し、同誌は見せびらかしの作法だけではなく心の教育が必要であると主張した。そしてその姿勢は、女性の「精神的、道徳的、宗教的」向上を目指したヘイルが編集に加わるとさらに強化されることとなる（36, Dec., 283）。ヘイルのもとに掲載された物語の多くは、思慮深く謙虚な女性たちを理想化し、読者の振舞いを正す道徳的な教科書の役割を果たした。しかしながら、男女平等を主張し女性に公的市民としての権利と義務を要求する婦人参政権運動とは一線を画し、同誌は男女分離主義的イデオロギーに基づきながら、家庭性の延長としての良き女性の役割を説いたのである¹⁶。教育や学問が奨励されたのも、独立革命期に形成された「共和国の母」¹⁷なるイデオロギーを背景として、未来のアメリカを担う立派な成人男性を養育することが目的とされていたからだ。妻として夫を暖かく向かい、母としてアメリカの未来を担う男子を育て上げ、女主人として家事をつつがなく行うこと、つまり家庭人としての責務がことさら重視されたのである。

ところで宗教的かつ政治的信念に基づくこのような「家庭人」としての役割は、ヨーロッパの上流階級をモデルとした「レディ」としての作法と一見相容れないように思われる。しかし『ゴードイズ』は、「レディ」の作法を「家庭人」の仕事として読み替えることで、女性に求められた二つの役割を調停しようとした。「刺繍」を例に見てみよう。針仕事自体は階級に関わりなく古くから多くの女性が従事してきたが、なかでもとりわけレディにふさわしい趣味と見なされたのが刺繍である。それは必要に迫られた修繕でなく、時間を持て余した高貴な身分の女性の手遊びでもあったからだ。「刺繍をする」とは、その行為を実践する者の時間的余裕と経済的地位を示すことであり、そのような技量を身につけた自身の能力を示すことである。そ

して出来上がった作品は、作り手の「洗練された」趣味を示すものと見なされた。『ゴードイズ』は「装飾芸術家 (The Ornamental Artist)」と題した記事において、初期から刺繍に加え、小箱やテーブルマットなどのさまざまな装飾品を掲載した (31, Feb.)。「装飾芸術家」とは、独自の制作物を創造する芸術家を指しているのではなく、誌面に掲載されたパターンに従ってどれだけ忠実に模倣することができるか、すなわちモデルを忠実に模倣する技術もしくは作法 (art) を身につけた名人 (artist) とも言うべき女性像を表していた。手本に倣って針を進める女性の姿は、ギリシャ神話に登場するペネロペの姿にも例えられた (30, No.1, 12)。それは織物を織ってはほどき、日がな戦地に赴いた夫を待ち続ける貞淑な妻の姿である。妻としての良き行いが「織物」を通して示される。同様に、「刺繍」は「優雅な仕事 (graceful occupation)」であり「エレガントで実用的な教養 (elegant and useful accomplishment)」と見なされたのである。

このような装飾品の制作は、まさしく「レディの仕事場 (Ladies' Work Department)」(46, Sept.) と題された特集のもとで発展させられてゆくことになる。刺繍やかぎ針編み、網細工の制作方法が、使用道具やパターンとともに紹介された。産業化による機械生産の安価な既製品が普及したことも、手作りの価値をさらに押し上げることとなった。装飾刺繍や帽子やバッグなど、作り手自身のための装身具ばかりではなく、テーブルカヴァー、クッション、マット、スリッパ、赤ん坊のゆりかご用カヴァーや膝掛けなど、家族が室内で使用する小物までもが掲載された。ここであるファッションプレートを見てもよい (図3)。編み物をする母親の傍らには、ゆりかごのなかですやすやと眠る赤子とそれを見守る娘。しかし描かれているのはそれだけではない。編集後記には「家庭の風景 (a domestic scene)」としてタイトルが示され、「ドレスに見られる最新の傾向だけでなく、ゆりかごや安楽椅子、フットクッションなどの形に見られる近頃の変化もわかります」と述べられている (45, Aug.)。このような解説は、室内装飾に対する読者の関心を引き出すものとして機能している。さらには40年代の後半には、室内装飾自体を主題とした版画が次々と掲載されるようになる。椅子 (47, Jan.) (図4) やテーブル (51, Feb.) ゆりかご (49, Aug.), ベッド (49, Oct.), カーテン (52, Feb., 173, 52, July, 113) など、それまでファッションプレートの背景に、主役の女性に華を添えるために描かれた事物が独立して、一つの版画として提示されるようになるのだ。



図3 「家庭の風景」



図4 三脚の椅子

自ら手がけた制作物で自身を飾り、周囲を装飾品で満たしてゆく。それは「女性の領域」¹⁸と呼ばれるものを物理的に拡張してゆくことである。そしてこのような女性の行為は、これから見てゆくように、女性自身の身体やその周辺ばかりではなく、女性が存在すべきその空間、すなわち「家」そのものへと及んでいたことが明らかになるのである。

3. 家を通して表象される女性

これまで、19世紀アメリカの女性誌において、女性の「飾る」という行為がいかに言説化・視覚化されてきたのかを見てきた。『ゴードイズ』が紹介したファッションや手作り装飾品は、装飾と機能が一体化したものに価値を見いだす現代的視点からすると、実用性を全く考慮しない装飾過多のパターンでしかないように思われる。ところが19世紀アメリカ女性にとっては、装飾のための装飾こそがまさに機能と一体化した実用性であったのだ。刺繍をはじめとする様々な装飾品で家庭を満たしてゆくこと、それは外の荒々しい社会からの避難場所として、心地よく快適な家庭を作り出す試みと見なされた。すなわち、自らを飾り、自らの存在領域である室内を飾る。それは都市化と工業化の進んだ近代社会において、公私を分離し、家庭を聖化する試みであり、それこそ女性の使命とされたのだ¹⁹。そして『ゴードイズ』において、そのような女性の使命はモデルとしての「家」の登場によって強力に推進されていた。その名も「コテージ・モデル」と題された新たな特集記事を通して、「家」との関わりにおいて提示された女性像をここでは検討していこう。

1846年から開始されたこの注目すべきテーマは、住居モデルを紹介したものである。初回9月号の記事の冒頭では、新連載を取りあげるにあたっての目的と内容が説明された。

「優雅なコテージを建てるのが、我が国の教養ある人々の間で流行として広まっています。快適で便利だけでなく美しい設計と立地条件が、都市や街に住む人々にますます評価されるようになってきました。賞賛に値すべき実用的な趣味の普及に向けて、広く知られる我が誌が影響力をもつことを期待し、読者の皆様にコテージ・モデルの版面のすべて、包括的な設計図、透視図と建造物の異なる側面の外観をご紹介します、実際の建築家が利用しやすいように配慮することにいたしました。」(46, Sept., 133)

冒頭の説明のあとには、二ページにわたって透視図や平面図の他、細部の装飾を示した図等が掲載され、設備と構造、場所に関する説明が組み込まれている(図5)。内容を具体的に見てみよう。透視図に描かれているのは、一棟の住居であり、中央は二階建てで二本の煙突が立っている。平面図には、「申し分のないキッチン (good



図5 「コテージ・モデル」

kitchen)」を中央としてパントリーや台所、階段やトイレ、家禽用の部屋、ポーチなどが配されている。二階は寝室のみである。いわく「とても小さいけれども、快適で便利な点をたくさんもつコテージ」(46, Sept., 134)である。住居モデル自体は、イギリスの造園家J.C. ラウドンの著作からの引用であると想定されるが、翌10月号にはこの新しい特集に対して読者からの大きな反響があったことが報告され、以降も毎月のように記事は掲載された²⁰。それにしても「コテージ・モデル」はどのような社会的背景のもとに登場したのだろうか。

「コテージ・モデル」が読者に語りかけているように、1840年代のアメリカは住居建築に対する関心が高まりを見せた時代であった。まだ本格的な産業革命の到来を迎える前ではあったが、30年代からの鉄道網の発達や商業経済の発展を受け、アメリカの諸都市は急成長していた。しかしそれは一方で生活環境の悪化をも意味する。どのような家に暮らすべきか、快適な住まいとは何かという問題意識が人々の間に芽生えはじめ、仕事と生活の場を切り離すべく、過密する都市から郊外への移動が始まった。とはいえ、それまでのアメリカには建築家と呼びうる職業は確立しておらず、出版物もほとんどが大工仕事を請け負う職人ための手引きであった²¹。ところがラウドンの影響のもとに、アメリカ建築の理論的支柱を築いたA.J. ダウニングの著作が世に出始めたのは40年代のことである。ダウニングは、郊外の美しい田園風景のなかにあるゴシック様式の住居を数多く取り上げた²²。『ゴーディズ』にも緑豊かで落ち着いた場所に建てられる比較的小さな住居が掲載されたが、初回の「コテージ・モデル」の選択は興味深いものである²³。というのも、記事には「インテリア」とキャプションが付された断面図が掲載され、部屋の構造だけではなく、内部に置かれた家具や装飾品、さらには人物までもが描かれている(図6)。記事の引用元と想定されるラウドンの千数百頁に及ぶ著作の中で室内風景の図版を伴っているのは、唯一このコテージだけである。さらには、微細であるがそこには看過し得ない相違点が発見される。ラウドンの著作の断面図の一階部分には、テーブルで静かに食事をとる夫婦二人の姿が描かれているのだが(図7)、『ゴーディズ』のそれは「家族」像なのである(図8)。正面には母親が、その左には幼い子供がテーブルの上から顔をのぞかせている。食器にはまだ食べ物が並んでいるようだ。母親の右には、赤子をあやす父親の姿が描かれている。後方の開きっぱなしの扉は、彼が仕事から帰宅したばかりであることを示しているかのようだ。夫婦二人に幼い子供二人を加えた小さな家族の団欒の様子がここには描かれているのであ



図6 透視図



図7 ラウドンによる夫婦像



図8 『ゴーディズ』の家族像

る²⁴。このように、「コテージ・モデル」において家族とともに過ごす女性の姿が再現されたように、40年代後半から50年代初頭の『ゴードイズ』では、「家」との関わりにおいて様々な女性像が表象されるようになる。

ファッションプレートの中に、「母」としての女性像が子供たちとともにしばしば描かれる一方で、版画の中には家庭を取りまく様々な登場人物を描くことで、不在の「女主人」を暗示するものが出現する。『女主人のボネ』と題された版画を見てみよう（48., Sept）（図9）。絵画や天蓋つきのベッド、鏡台の置かれた部屋に、一人の女性が描かれている。彼女が掃除婦であることを示すのは、その手にあるモップと質素な身なりだ。ところが豪華な羽飾りのついたボネ（帽子）とふかふかのマフを身につけ、彼女は鏡の中の自分の姿にご満悦である。それらが「女主人」のものであることは、後方の椅子の上にある蓋の開いた帽子箱が示している。同じく帽子箱の登場する版画を見てみよう（図10）。こちらは帽子箱を注文主に届けるお針子の姿を描いたものである²⁵。その表情は帽子で覆われて何うことができないが、なんと上半身は骸骨姿であり、帽子箱に添えられた手も骨がむき出しになっている。記事には、狭い部屋で長時間労働を強いられるお針子たちの過酷な労働状況が記されている。そして「賢明な読者の皆様は自身の健康に留意なさいますが、恵まれない方々への気遣いも忘れない」よう求めている。ドレスを完成させるために理不尽な要求をしないよう、そして支払いを遅らせないよう読者を戒めつつ、ファッションナブルなドレスは悲惨なお針子たちの犠牲の上にあると論ずるのだ（47, July, 49）。



図9 「女主人のボネ」



図10 「健康と美」

これらの版画における不在の「女主人」は、豊かな住まいで流行のファッションを身につけることのできる夫人であるように思われる。ところが同時代の物語には、家を取りしきるために奔走する「女主人」の姿さえも見られる。『安物のドレス』と題された物語では、特売の生地を手に入れて装飾をふんだんに取り入れた豪華なドレスを仕立てる女性の姿が描かれている²⁶。この「安物」のドレスが発端となって主人公には様々な災難が降り掛かるのだが、忌々しいドレスを手放す際にも使用人に見られまいと密かに古道具屋を家に招き入れるのだった。一方、『燃料不足』と題された物語では、ずる賢い使用人のために冬場の暖を取る手だてを失い、夫婦で口論する様子が描かれている（50, Mar., 197）。

以上のように、40年代後半から50年代初頭にかけての『ゴードイズ』は、「コテージ・モデル」のなかで小さな家族のための住居モデルを提案しながら、理想的家族像までもを視覚化し

た。そして物語や版画においては「小さいけれども快適な家づくり」に奔走する女性を描く一方で、「家」をとりまく多様な人物を登場させながら不在の女主人を暗示する。理想としてのレディよりもむしろ、さまざまな女性像が「家」を通して表象されるようになるのである²⁷。

おわりに

これまで、1830年から50年代初頭における『ゴードイズ・レディズ・ブック』の言説とイメージを通して、ファッションがいかに正当化され、家庭装飾の奨励とともに女性の「飾る」行為がどのように言説化されてきたのかを検討してきた。『ゴードイズ』は、創刊号から最新流行を伝え、ファッションプレートの掲載に努めた。同誌がファッションを積極的に取りあげたのは、商業の発展と出版業界の競争を背景に、販売促進に繋がる人気特集を必要としていたからだと考えられる。しかし外面的飾りを忌避するアングロサクソン・プロテスタント的精神に、外見を装う作法であるファッションはそぐわない。そこで『ゴードイズ』は、内面と外見を結びつけるべく、こころを外見によって表すように説いた。「妻」として「母」として「女主人」としての良き行いは、慎み深く控えめな装いによって示されるものと見なされた。「こころの飾り」としてのファッションは、逆説的にも飾らないファッションであることによって可能となったのだ。さらに『ゴードイズ』は、ファッションだけでなく、室内装飾や住居モデルまでも特集し、「飾る」行為を家庭内へと拡張し、女性の仕事として言説化した。それは使用人に課せられた掃除や洗濯、料理といった労働とはあくまで異なる行為である。家族のために手作りの品を作成し、室内を装飾品で満たしてゆく。そのような「快適な家庭」を作るための努力は、『ゴードイズ』の言説において、良き女性の仕事として正当化されたのである。そしてここには、19世紀アメリカにおける装飾の過剰に対する一つの回答を見いだすことができると考えられる。

そもそも外面的な飾りを忌避したアングロサクソン・プロテスタントの入植した東部アメリカにおいて、過剰なまでの装飾的嗜好が生まれるにいたったのは何故なのか。飾る。自ら手がけた装飾品でドレスを飾るように、周囲の室内空間をも飾る。それは、これまで述べてきたように、家を中心に存在する女性が空間を私化し、外の社会に対して内なる快適な家庭を作り上げる試みであった。自らの存在領域を装飾で満たし、「女性の領域」を拡張してゆく。表面を占有することで自己規定を行う女性たちの努力こそが、果ては装飾の過剰へと導かれたと言えるだろう。営利を敵視したアングロサクソン・プロテスタントが「天職」²⁸の理念によって近代的な資本主義の精神を築きあげたように、虚飾を敵視した彼らは「小さいけれども快適な家づくり」のために、はからずも「自他」を飾る行為を女性の仕事として推進することになったのだ。

最後に「かごの鳥 (Cage Birds)」と題された特集を見てみよう。鳥の種類を解説する一方で、室内でかごの中の鳥を愛でる女性の姿がイラストに描かれている (50, Apr., 262) (図11)。読者が愛でていたのは、鳥ではなく「かごの中の鳥を見る女性」であり、女性に重ね合わせられた自分自身である。自らを飾り、身边を、室内を飾り付ける女性。そしてその女性像を見つめる女性読者たち。自らが飾る主体であるとともに、飾られる対象でもある、そのような女性のトートロジックな振舞いと視線のやりとり



図11 「かごの鳥」

は、19世紀アメリカにおいて『ゴードイズ・レディズ・ブック』の言説とイメージによって強力に推進されたのである。編集者の意図と読者の期待と社会の要請が交叉する言説の織物である女性誌において、19世紀アメリカを生きた人々の様々な欲望が出会う。『ゴードイズ・レディズ・ブック』は、近代的女性像の形成される一プロセスを、まさに縮図として提示しているのである。

付記

本論は、平成18-21年度文部科学省科学研究費（若手研究B『『ゴードイズ・レディズ・ブック』における良き女性とファッションの表象』）による研究成果の一部である。

注

- 1 エドガー・アラン・ポー「室内装飾の哲学」松原正訳、『ポオ全集3』東京創元社、1963年、p.286.
- 2 ソースティン・ヴェブレン『有閑階級の理論』高哲男訳、筑摩書房、1998年。
- 3 アレクシス・ド・トクヴィル『アメリカのデモクラシー（二巻上）』松本礼二訳、岩波文庫、2008年、p.94.
- 4 同書、pp.68-69.
- 5 ファッション史における『ゴードイズ・レディズ・ブック』研究の意義については以下を参照。拙論「ファッション史の相対化の試みー『ゴードイズ・レディズ・ブック』を手がかりに」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、第三巻二号、2010年3月発行。
- 6 『ゴードイズ・レディズ・ブック』は、大きさ約25×15センチ、ページ数は（1840年代は）約60頁であり、価格（年間購読料）は3ドルの月刊誌であった。
- 7 出版者であるルイス・ゴードイ (Louis Antoine Godey, 1804-1878) の仕事には、*Daily Chronicle* や *The Young People's Book* などが挙げられる。
- 8 作家としても活躍したセアラ・ヘイル (Sarah Josepha Hale, 1788-1879) の評価の歴史とその見直しについては以下を参照。Patricia Ann Okker, *Feminizing the Voice of Literary Authority: Sarah J. Hale's Editorship of the "Ladies' Magazine" and "Godey's Lady's Book,"* University of Illinois, 1990. Okker,

Our Sister Editors, Georgia: The University of Georgia Press, 1995.

- 9 70年近くに及ぶ出版期間のうち、読者数は49年には4万、60年には15万と報告されている。自誌の過大な宣伝という側面を差し引いたとしても、その社会的影響力は看過しえない。同誌の出版・編集体制の変遷については以下を参照。Frank Luther Mott, *A History of American Magazines, 1741-1850*, Cambridge: Harvard University Press, 1930, p.580. アメリカ女性誌の展開における同誌の形式・内容の変遷については以下を参照。Phyllis G. Tortora, *The Evolution of the American Fashion Magazine as Exemplified in Selected Fashion Journals 1830-1969*, New York University, 1972.
- 10 拙論「フィラデルフィア・ファッションー『レディズ・ブック』における良き女性の表象」『服飾美学』第47号、2008年、pp.55-72参照。
- 11 1830年代から50年代の東部アメリカにおけるファッションの社会的受容に関しては以下を参照。Karen Halttunen, *Confidence Men and Painted Women*, New Haven and London: Yale University Press, 1982, pp.64-65.
- 12 近代以前の西洋における「作法」としてのファッションの発展については以下を参照。拙論「ファッションーまなざしの装置」『服飾美学』第39号、2004年、pp.37-54.
- 13 議論の詳細は以下を参照。拙論「正統なるファッションとは—『ゴードイズ・レディズ・ブック』のファッション・プレートをめぐる言説」『美学』第235号、2009年、pp.84-97.
- 14 東部アメリカにおける女性誌の出版状況については以下を参照。Bertha M. Stearns, *New England Magazines For Ladies 1830-60*, *The New England Quarterly*, 1930, Jan-Oct, pp.627-656. Caroline Jone Garnsey, *Ladies' Magazines to 1850*, *Bulletin of the New York Public Library*, 1954, pp.74-88.
- 15 Professor Frost, "The Boudoir; Or the Modern Cimon," 1843, June., pp.1-4参照。
- 16 サラ・M・エヴァンズ『アメリカの女性の歴史』小檜山ルイほか訳、明石書店、pp.162-163.
- 17 Linda K. Kerber, *Women of Republic*, Virginia: The University of North Carolina Press, 1980参照。
- 18 "The Sphere of Woman," Translated from the German of Goethe, 1850, Mar., 208-209.
- 19 Beverly Gordon, *Victorian fancywork in the American Home: Fantasy and Accommodation*, *Making the American Home: Middle-Class Women & Domestic Material Culture, 1840-1890*, ed. Marilyn Ferris Mott and Pat Browne, Bowling Green State University Popular Press, 1988, p.64.
- 20 当時の出版業界においては転載が慣習化しており、「コテージ・モデル」の住居モデルの多くも引用の可能性が考えられる。『ゴードイズ』の記事に著者名は明記されていないが、『ゴードイズ』の図版とラウドンの著作を比較考察するならば、初回の住居モデルはラウドンの著作からの引用と想定される。J.C. Loudon, *An Encyclopaedia of Cottage, Farm, and Villa Architecture and Furniture*, London: Longman, Brown, Green, and Longman, 1846. (1833年に出版された書籍をラウドンの死後、夫人が新装版として再販したものの) pp.62-64参照。「コテージ・モデル」に関係する建築家については以下を参照。George L. Hersey, *Godey's Choice*, *The Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 18, No. 3 (Oct., 1959), p.105参照。
- 21 40年代のアメリカにおける建築関連の出版物については以下を参照。Henry-Russell Hitchcock, *American*

Architectural Books, New York: Da Capo Press, 1976.

- 22 ダウニングの著作に関しては以下を参照。Andrew J. Downing, *A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening, Adapted to North America; With a View to the Improvement of Country Residences*, University of Michigan, 2006. *The Architecture of Country Houses*, New York: Dover Publication, 1969. *Victorian Cottage Residences*, New York: Dover Publications, 1981.
- 23 1850年代半ばから1860年代にかけての「コテージ・モデル」では、より部屋数が多く、大きなヴィラが好んで取りあげられた。連載も毎号ではなくなり、透視図や平面図の視覚的イメージのみという簡潔なスタイルへ変化してゆくが、1880年代まで続く人気テーマであった。
- 24 人物以外の家具や装飾品などのモチーフは同じである。この相違点が『ゴードイズ』によって意図的に改変されたものなのか、それとも別に元となった図版が存在したのかは現段階では確証が得られていない。
- 25 同図版は、イギリスの雑誌“The Illuminated Magazine”に掲載されたイラストの転載と考えられる。『ゴードイズ』のイラストでは女性の頭上は余白となっているが、元のイラストには“Death and the Drawing Room, or the Young Dressmakers of England”と記されている。『ゴードイズ』の記事では当時のイギリスのお針子の窮状が述べられ、来るべきアメリカの社会状況が案じられている。イラストの参照元については以下を参照。*The Illuminated Magazine*, 1843, Jun., p.97.
- 26 Mrs. A. M. F. Annax, “The Cheap Dress,” 1845, Sep., pp.86-91.
- 27 1840年代後半の『ゴードイズ』において下層階級の女性たちが表象され始めたのは、新興階級自体の増加とその多様化による購買数の増加ならびに購買層の拡大の影響も考慮に入れなくてはならない。中心的読者層には、一部の上流階級や新興階級ではなく、都市部を中心として増大した中流階級の人々の存在が加えられたことが示されている。「小さいけれども快適な家」には、パーラーやドローイング・ルームのような社交の繰り広げられる客間はないし、レディの趣味の実践の場としての「私室」もない。装飾品制作を紹介した『レディの仕事場』は『仕事机 (The Work Table)』(48, Jan.)と称され、タイトルから「レディ」の文字が消えるのである。
- 28 マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店、1989年。